

平成20・21年度事業評価及び博物館協議会からの指摘事項

■評価全体を通しての協議会からの指摘事項

- 事業のねらいと結果をきちんと整理した上で評価したほうが良い。また、評価をする上で、事業にかかった費用や観覧者数など定量的に判断できる指標や事業終了後にどのような課題が残ったのか、あるいは課題同士を比較できるような統一的な指標（例えば、入場比率の視点は面白い）があると良い。
- 参加者アンケートでは、事業の狙いに対応した結果が出るかを見る方法もある。課題が浮彫りになることもあり、悪い結果でも公表する必要がある。また、回答数の多寡も指標になる。
- 博物館のミッションは明確化しているのか。
 - 館の使命については、設置条例以外に明文化したものはなく、今後の課題の一つである。
- 博物館のかかえている課題とは具体的にどのようなことか。
 - ①市町合併に伴い、新市域となった津久井地域の調査研究活動及びその成果の発表、②常設展示リニューアル計画の推進、③政令指定都市移行に伴うより広域的な展示、④博物館ネットワーク計画の推進、⑤市民との協働による博物館活動の実現、⑥学校教育との連携、⑦JAXA宇宙科学研究所との連携などである。今後は、中・長期的な目標を定めた上での課題を一層整理し、明示していかなければならないと認識している。

■課題1(市内の大学との連携について)

事業名	カエルアートコンテスト作品展
開催時期	平成21年5月30日～8月30日
ねらい	同日程で開催した企画展「スキスキ大スキカエル展」に向けてコンテストを行うことで、企画展の話題づくりをし、広報効果をねらった。
概要・展開	企画展へ全面的にご協力いただいた女子美術大学の学生チームが企画し、チラシのデザインや作品受付事務、審査、展示等の実務を行った。 3月に作品募集告知、4月末に作品受付、5月初旬に審査、5月30日の企画展初日に表彰式を行った。応募全作品を企画展展示会場及びエントランスに展示した。審査には教育長、館長、女子美術大学教授や学生、展示資料を借用した100年カエル館館長等が当たった。
自己評価・反省	応募点数が200点を超え、大変盛況だった。話題づくりの点でも周知効果が大きかった。応募は市内の小中学生が中心であったが、東京など近隣地域、遠くは兵庫県から応募があった。受賞者への副賞は教育長賞が図書カード(1万円分)のほかは、カエルに関連したグッズを商品化している企業等からの提供品を使用したため、低コストでまかなえた。

事業名	企画展「スキスキ大スキカエル展」
開催時期	平成21年5月30日～8月30日
ねらい	カエルをグッズ、アート、生態学、保全生物学など、さまざまな側面から紹介し、相模原市の生物相の中でも象徴的な位置を占める両生類を身近に感じてもらうことを目的とした。
概要・展開	女子美術大学カエルアート学科と銘打ったプロジェクトチームがポスターデザイン、導入空間の制作、ワークショップの企画運営等に当たった。このほか、市内在住の写真家の作品や100年カエル館のカエルグッズ、女子美術大学の学生作品を展示したほか、市内に生息する両生類の生態展示を行った。
自己評価・反省	開催期間中の入場者数は31,601名で、来館者の中の入場比率は高かったと考えられ、カエルに対する愛着の高さが窺えた。また、今回はアートコンテストとタイアップさせることにより、出品者が家族連れで訪れることで入場者がかなり上積みされたと考えられる。出品者、協力者のご厚意で運搬費や著作権使用料にコストを大きくかけることなく展示できた。

□協議会からの指摘事項

- 女子美術大学との連携は先進的な事例で、他の学芸分野の事業でも取り入れて手法を確立し、全国に発信していくべき取り組みである。反面、女子美術大学の柔軟な対応があったから実現できた事業で、他の大学と連携する場合はその仕組みが作れないと上手く進まない。その点からは相模原・町田大学地域コンソーシアムを上手く活用できると良い。
- 大学生の“やる気”を上手く引き出した点や展示が多角的だった点など、いろいろな要素が相乗効果で展示全体の魅力を高めた事業であり、大学がどのような形で関わったのか、どれくらいの人に関わったのかも評価の一つの指標となる。
- 子どもたちの喜ぶ姿もたくさん見受けられ、見ていて楽しい参加者が楽しめる展示だった。世代や性別を問わずに親しまれる“カエル”を取り上げた点は実に良かったと思う。事業のネーミングもとても良かった。なぜカエルをテーマにしたのか。
→以前から展示をしたいテーマであり、協力をしていただいた市内在住の写真家や女子美術大学の担当教授もカエル好きという共通点があった。新市域を象徴する“水”と“緑”との境界に生息するカエルの展示を通して、両生類を身近に感じて欲しいと考

えて取り上げた。

○相模川ふれあい科学館との連携があるともっと広がりがもてた。また、SR（企業の社会的責任）において、どこに投資するか迷っている会社もある。そうした会社との連携も模索してみてもどうか。

→ふれあい科学館とは、事業の準備が短期間だったため連絡調整ができなかった。

○コンテスト等では応募状況により担当学芸員の事務負担が膨大になると思われるため、フォロー体制を整えて取り組む必要がある。

→子どもの作品を中心に全国から200点以上の応募があり、事業周知と集客効果が高かった。今回実施できたのは、大学生の企画運営によるところも大きい。

■課題2(新市域を視野に入れた博物館活動)

事業名	企画展「みてみて津久井ただいま調査中！！」
開催時期	第1期「津久井地域の自然」平成20年7月19日～9月23日 実質開催日数73日間 第2期「津久井地域の歴史と文化」平成20年10月4日～11月30日 実質開催日数50日間
ねらい	広い平坦面を持つ合併以前の相模原市とほとんどが山地で占められ新たに相模原市となった旧津久井郡地域とでは、その自然と文化は異なる。現在、博物館では、新市域の調査を各分野で進め、新たな情報や資料が蓄積されつつある。この企画展では、新たに明らかになった事実も含め、津久井地域の自然と文化を紹介することを目的とした。
概要・展開	第1期・自然分野「津久井地域の自然大発見!」、第2期・人文分野「津久井の歴史と文化ー山川を舞台とした人々の暮らし」をテーマに展示し、関連事業として、講演会(日曜講演会)や展示解説のほか、クイズラリー(第1期)、新市域探訪会、繭うさぎ作り体験(第2期)など多彩に開催した。
自己評価・反省	展示は大きなテーマに分けて展示したため、来館者も見学しやすかったようである。また、第1期では会期中に夏休みを含むので、子供たちにも楽しんでもらえるように展示室内に遊びの広場を設置したり、会期中6回クイズラリーを開催した。クイズラリーはクイズに答えるため解説パネルを普段よりじっくりと読み、理解が深まったようである。 関連行事では、さまざまな切り口から津久井を理解することにつながる講演会を行い、また、参加者を飽きさせないために展示解説で見せた生きたヤマビルなども非常に好評であった。

□協議会からの指摘事項

- 新市域紹介は分かりやすく、関連の講演会は展示の理解が深まってとても良かった。津久井地域についても常設的な展示があると学校の授業との関連性も深まる。また、旧市域の人たちに新市域を紹介する展示とともに、津久井地域の人たちにも自分たちの事として捉えられるような展示を考える必要がある。
- 市域が広がったことにより、資料調査活動やネットワーク計画の取り組みなど、学芸員の負担が相当大きくなったと思う。
 - 現地での資料調査など、ボランティアの活動が大きな役割を果たしている。ボランティアグループについては、個々の活動を尊重しながら良い関係を保持していきたい。
 - ネットワーク計画「さがみはらどこでも博物館」の具体的な内容は現在検討中であり、城山エコミュージアムの取り組み等との連携をよく調整しながら計画を推進していきたい。

■課題3(学校教育との連携)

事業名	学習資料展「大地さんと未来さんが見つけるちょっと昔の暮らしV～なつかしい学校と遊び～
開催時期	平成21年1月24日(土)～5月10日(日)
ねらい	学習資料展は、学校と博物館の連携の視点から平成16年度に「収蔵品展」から名称を変更したものである。展示内容も特に小学校3・4年生の社会科「昔の暮らし」の単元に対応した昔の生活に関するものとしている。
概要・展開	本年度の学習資料展は、“学校”や“遊び”の場における“子どもたちの姿”を中心に、広く昭和20年代から50年代くらいまでの資料を展示した。また、関連事業として、チャレンジ体験(「昭和の遊び、道具にチャレンジ!」)・ボンネットバス展示・記念講演会「わらべ歌が子どもを育てる」などを実施した。
自己評価・反省	<p>展示準備が短かく直前まで追われる状態であったので、計画的な準備作業ができるようにしたい。見学する中で、子どもと保護者または祖父母という世代間の交流が生まれればとの願いは、展示場の様子や来館者の感想文を読む中である程度達成されたと思われる。</p> <p>体験コーナーについては、平日の来館者への対応ができないことや、特定の市民学芸員への負担が大きくなっていることなど課題が残った。さらに、“遊び体験”と“道具体験”に分けて行ったチャレンジ体験は、展示室の保全、安全確保などの観点から体験できる内容が限られた。日曜講演会は他の講演会と内容が大きく違うこともあり、学校や幼稚園など、より広範囲に早めの広報を行う必要があった。</p> <p>学習資料展の主たる目的である「メインの対象が小学生で、学校の授業で利用してもらうこと」、「収蔵品展に端を発した学習資料展」という2点に立ち返ることを念頭に、毎年何らかの特色づくりに努める。しかし、従来の良いところは積極的に残し、なるべく基本的な部分は大きな変更のない中で進めていくことも必要である。</p>

□評議会からの指摘事項

- 学習資料展はどのような位置づけか。また、学校利用時の対応はどのようにしているのか。
 - 学校と博物館との連携の視点から、小学3年生の総合学習「昔の暮らし」の単元に対応できる内容で開催している。学校側の要望に応えられるように、事前打合せによって詳しい内容を決めている。教科書だけでは学びきれないことを体験的に学習できる内容も保護者の協力をお願いし、実施している。市民学芸員によるチャレンジ体験では、輪ゴム鉄砲作りなどの昔の遊びや石臼挽きなどの昔の道具体験などを通して世代間の交流の機会となっている。
- 学校では授業で子どもたちの課題を整理させた上で、教科書等で得た知識について実体験を通してさらに理解が深められるように取り組んでいる。博物館だけではなく、地域の民家やお年寄りたちの協力により取り組んでいる学校もある。
- 教育課程と開催時期を一致できるとなおいののではないか。
 - スケート教室との組み合わせで来館日程が組まれているという実態もあるため、学校によっては開催時期とずれてしまうことがあるが、今回は少し早めに事業を開始できるように計画したい。
- 収蔵品展という側面でもあり、希少性のある資料が見られる点においては展示を見に来る価値があると思う。
- 他分野の事業でも子どもたちが探求できるような取り組みを実施して欲しい。

■課題4(博物館の大きな特色である天文分野の活動)

事業名	星空観望会
開催時期	平成20年4月～平成21年3月(全44回計画 30回実施)
ねらい	プラネタリウムや天体観測室の機材を公開し、季節に応じた天体の観察をすることで広く市民に天文知識の普及を図る。
概要・展開	天体観測室の40cm反射望遠鏡とテラスにて小型望遠鏡を用意し、参加者に季節ごとの星空を紹介しながら天体の観望を行う。事前にプラネタリウムにてガイダンスを行う。
自己評価・反省	申込み方法を往復葉書に加え、Eメール可にしたところ、参加者が増し、開館以来最大数(年間参加者1,294人)となった。反面、雨天の場合の振替ができない状況に陥った。 冬期期間と夏期期間の開始時間を分けたところ、参加者の遅刻が多く、運営に支障を来す状況が生まれた。 雨天時は中止とせず、プラネタリウムで「星空教室」などの楽しめる内容を取り入れて開催すること、季節別の開始時間を統一することについて検討したい。

□評議会からの指摘事項

○毎週実施することはとても大変なことだと思う。当日は何人で対応しているのか。どのようなプログラムで対応しているのか。参加者の年齢層は把握しているか。リピーター率はどのくらいか。幅広い年齢層の参加であるが、雨天時等の「星空教室」での解説はどのように対応しているのか。リピーター向けや初めての人向けなど市民ニーズを把握し、レベルに応じた受け入れ対応も必要ではないか。

→当日は5人で対応している。プログラムは、星空生解説は当日の夜見える星空を中心に適時対応し、雨天時等の「星空教室」は1か月ごとにテーマを変更している。参加者の年齢層については、統計を取っていないが子どもからお年寄りまで幅広い年齢層である。10歳代後半から20歳代までの年齢層の参加が極めて少ない。リピーター率は40パーセント程度である。

星空観望会は正しいデータをきちんと見せることが大切であると考え、子どもからお年寄りまで同じレベルでの解説としている。また、天文分野への入り口とも考えており、これをきっかけに次の段階へとつながるように、別事業として親子天文教室や子ども天文教室などを開催している。

○電子メールの導入により、応募者数が顕著に増えたとのことだが、申込みしやすい一方、簡単に欠席できるのではないかと思うが欠席率はどの程度か。

→欠席率は2割程度である。

○国立天文台では、大学生が主体的になって定期的に観望会を実施している。難しい天文現象を子どもでも分かりやすく、やさしく教えられるように大学生自身のプレゼンテーション能力の向上にもつながっている。

○JAXAの大学生の協力が得られれば事務負担を低減することができると思う。JAXAが定常的に協力できることの一つであり、実現できればお互いに得るところが大きく、博物館とJAXAとの連携がより深まると思う。

→JAXAとの連携は不可欠であり、以前から講演会講師や資料借用等で協力していただいている。JAXAの大学生には子ども天文教室の講師として来ていただき大変助かっている。今後も連携を図っていきたい。

■課題5(市民協働の方向性)

事業名	民俗講座「民俗に親しむ会」
開催時期	平成18年7月8日～21年6月13日(全36回)
ねらい	民俗講座では、平成14～17年度にかけて、参加者自らが地域の行事を調べていくことを目的とした「道祖神を調べる会」を実施しているが、今回も民俗学的な視点から地域を捉えていく視点を学ぶことを目的とした。
概要・展開	月1回、基本的には毎月第2土曜日に館内の講座と野外でのフィールドワークを組み合わせ、博物館内の講義と野外のフィールドワークを交互に行ないながら進めた。
自己評価・反省	<p>自らが住む地域から出発し、周辺地域と比較していくといった観点から設定したものであり、有効であったと考えられる。</p> <p>実際に講座を受講した方の意見を確認するために、最後の回に感想文を書いて提出していただいた。フィールドワークを取り入れた講座では毎回のことはあるが参加者の満足度はかなり高いことが分かる。普段何気なく眺めているさまざまなものに歴史的な意味があり、それらを調べていくことで地域の生活や文化が見えてくるといった地域を見ていく視点・方法を重点的に説明しており、多くの参加者が理解したことが窺える。</p> <p>なお、この講座の出席者を中心に2つの「民俗調査会」が組織され、調査や展示に向けての活動等が行われている。</p>

□評議会からの指摘事項

- 大きな目標を設定してそれに向けて自主的な活動をしていくことはとても大切なことであり、今後も継続していくべきである。常設展示室の一部に活動の成果を発表できる場も必要である。
 - 常設展示リニューアル計画の中で適時データを更新できるコーナーを設け、発表の場とすることを検討している。
- 民俗調査会は自主的な活動が定着しているようだが、調査結果を何らかの形で発表するような条件を付けて活動しているのか。今後、市民発の企画展などへの展開もあり得るのか。
 - 何かを必ずやることを前提に活動している。フィールドワークの準備、下見など、全て調査会の人たちが自主的に行っている。展示についても、企画展の一部の展示で調査会でのフィールドワークの成果を発表した実績があるため、発展的な活動として続けていくことで実現できる可能性はある。
- フィールドワークの成果を民俗マップ等の形でまとめて、博物館のホームページなどで発信して欲しい。
- 市内には個人で研究している人もたくさんおり、研究成果の投稿を受けて研究報告等に掲載することや、研究報告をホームページで配信するなど、もっと手軽に見られるような手段も検討すべきではないか。